

# 人文学部で学び合った26年をふりかえって —学部の未来をみつめるために—

Yoshikazu Kobayashi

小林好和



10ヶ月児の指差し

人間科学科と英語英米文学科の2学科を擁する人文学部が誕生して34年が経過した。新年を迎えて間もない1月7日に「英語英米文学科出身英語教師の会」、8日には人間科学科を卒業し中学校、高等学校、特別支援学校教師として勤務する多くの卒業生が大学へ集う機会があった。そのなかに、1984年に卒業した第4期生の姿があった。道内の中学校、高等養護学校で教育活動に当たってすでに28年、先生は「支援し合う教育活動を通して生徒が成長してゆく姿をみること」が生きがいであると語った。私は、先生の語り口からいわゆる教員養成大学を卒業した方とは異なる「独自のなにか」のあることを確かに感じる事ができた。この「なにか」をもう少し探してみたい、このことは、改めて人間科学科で学び合った学生との少し長い教育活動を振り返ってみようと思う契機を与えてくれたように思う。

私が人間科学科に赴任したのは第9期生を迎える春であった。当時、大阪大学人間科学部を含め我が国に3大学だけが「人間科学」と称する学部・学科を有し注目を集めていた。私は大学院時代、大阪大学人間科学部心理学教室を中心とする共同研究チームの一員でもあり、部分的な状況を知るだけではあるものの、まだ個別科学の域を超えていないなどという生意気な印

象を持っていたことを思い出す。その時、「人間諸科学の総合」は大きな目標であり、当面は中間的であれ、具体的な総合の様相を提示すべきでないかと考えたのであった。それだけに、本学における人間科学科の一員としてのスタートは、狭い専門という領域を超え、「人間」を軸としていかに総合しうなのか、これから創り上げていく教育と研究における「未知との遭遇」と言っても過言ではなかった。

本学人間科学科は「社会生活と人間」、「人間の形成と発達」、「思想文化と人間」の3コースが設けられ、人間を探究する体制がとられていた。私は全学の教職課程に責任を負いながら「人間の形成と発達」コースに所属し、学生と向かい合うこととなった。大まかにみるなら、学生のねらいは社会福祉の領域、学芸員、教員などへ向けられているということが強い印象として刻まれ、このうち私が寄与しうる教員養成はまさに「人間科学」の学びの成果として有為な人材を育成するのではないかと考えたのであった。私の担当科目は「発達心理学」と「教育心理学」など、人間科学科におけるそれらの教育はいかに展開すべきであろうか。この問題は、私のなかで26年来の課題としてあり続けている。たとえば「発達心理学」、3、4年と言わず研究の進歩は目覚ましいものがある。講義で展開する内容は、果たしてそれらの紹介でいいのだろうか。学ぶ側の眼が何処に向けられ、なにを求めているのか、どのようなことであれば人間科学科の学生にとっての「成果」となりうるのか、いわゆる「学習者研究」が大学教育で不足しているのではないかという認識が私に覆いかぶさってきたのだ。学科に仲間入りして数年、考え続けたあげく「学生たちとかみ合うような講義」を目指すことにした。これを実現する一つの方法として、人間として発達するスタート時の赤ちゃんや乳幼児、彼らの様相を可能な限り、具体的な事例として提示する、そこから引き出される問題や意味を学生と考え合

ってみよう。しかもこの事例は私自身が収集すべきだ。知り合いで「赤ちゃんが生まれた」と聞くと、そこへビデオカメラを持って駆けつけたものだった。

教室で待ち受ける150人ほどの学生、誕生し病院から家へ帰ってきたばかりの赤ちゃんが「音が出て光るモノ（ガラガラのような玩具）を大きな目で見ると、見るばかりでなくその動きに合わせて身を動かして追視する」、「お母さんに抱っこされた機嫌のよい赤ちゃん、次第に身を乗り出すようにある対象（たとえば電灯）を眺めようとしている姿」をVTRで提示した。「確かに、赤ちゃんは外界のなにかを見ていると思う。しかし、何を見ているのでしょうか。」「どうも赤ちゃんが見る対象に、好き嫌いがあるように思う。」「他のものには目を向けませんが、何故、光るモノを目で追うのでしょうか。」など、学生の側に問いの生成がおこった。これらについて考え合う「やりとり」が教室で生じたとき、私の講義が少し軌道に乗ったように思った。もう少し、続けよう。9ヶ月を過ぎた乳児、明確なコトバにはならないものの、「元気のよい声を上げながら、盛んにあるモノを指で指し、母親がそれを見ながら語りかける」映像。乳児は「何か（たとえば動き回る水槽の魚）」を母親に伝えたい、乳児と母親の間にある対象を仲立ちとするコミュニケーションが生じる場面だ。「ことばの前のことば」と言ってもよい。後に、ある学生は「そういえば、母は私の弟が幼い時に指差しをするのを見たことがないと言っていた」という問題を提起したことがある。1歳になっても「指差し」が現れない、これは「他者（この場合は母親）に何かを伝えたいという意図が生じにくい」という心的状態と解釈していいのではないかという。この学生の弟はある障がいをもっていたのだ。彼女は、発達心理学ゼミナールに所属し、弟の日常生活を丹念に記述、分析、「私の弟は障がいがある。しかし、少し遅れたとしても、確実に社会的参加、教育の影響を受けて人間として発達するのだと確信する。」と締め括る卒業論文として結実させたのだ。

2004年度より人間科学科は「社会」「福祉」「心理・教育」「文化」「思想」の5領域を編成し、学生のより能動的な学びを引き出す体制へと移行した。先に述べた学生は、「心理・教育」を軸としつつ「福祉」「社会」を統合し具体的な「人間科学」として学びの成果をあげたモデルであろうと思う。人文学部の全ての学科に共通することであるが、「専門ゼミナール」は大学における家庭のような場でもある。「弟の障がい」に関する卒業論文作成の過程で行われたゼミナールの議論は他の学生の学びや生き方を触発することとなった。同じゼミナールに所属し中学校「社会」の教師を目指す

してきた友人は「障がい」の研究を続けた学生の教育・発達観に心を動かされ、養護学校教員になる道へと修正し教員採用試験を突破、現在は発達障がいの生徒の教育にあたっている。

話しは逸れるが、ゼミナールで忘れられない逸話がある。人文学部では1998年より沖縄国際大学文学部との間で「単位互換」協定を結んだ。以後、1年間ではあるが、沖縄から人文学部、札幌から沖縄国際大学で学ぶ学生が交流し、学び合ってきた。2000年4月、私のゼミナールにも沖縄国際大学から一人の学生を迎えることとなった。北海道に住んでは理解できない基地の状況、沖縄の歴史や生活、思いがけない学びの機会が提供された。沖縄の学生を迎え、「発達心理学ゼミ」も軌道に乗る6月頃だったと思う。ふと、あることが私の頭をかすめた。それは前年の秋、母を連れて沖縄を旅し、その様子を収めた8ミリビデオである。ある日、なにを思ったか、本棚の奥へしまい込んでいたVTRを再生してみた。糸満市から「ひめゆりの塔」を廻り「テーマパーク玉泉堂」、躍動感が溢れる「エイサー」…はつらつと太鼓を打ちながら踊る若者、そのなかに沖縄から迎えている学生の姿が確かに映し出されたのだ。この偶然な出会い、ゼミで説明しても容易に信じることができず、遂に「私ごとのVTR」をみんなで見て驚きの声を上げたのだ。

人文学部では中学校や高等学校、養護学校の教師、さらに社会福祉士、学芸員として多くの学生が出ていった。かつて教師を目指す人間科学科の学生から「小学校の教師になりたい」という声をいく度聞いただろう。その度に胸を痛めてきた。卒業のしばらく後に「通信教育で小学校免許を取得し先生になった」という連絡を受けた。その数は10名以上にのぼる。「臨床心理士」を求める社会の要請に応え2000年に「臨床心理学研究科」、続く2001年に「臨床心理学科」、さらに2006年に小学校免許を取得できる「こども発達学科」が開設された。これら研究科・学科の「生みの親」は人間科学科である。人文学部における小学校教員養成が始まり一期生38名に続く二期生が教壇に立つ春を待っている。今、4学科を擁する人文学部の教育・研究の可能性は極めて豊かだ。「真の人間尊重」の精神を受け継ぎ、人文学部ならではの教育を創出したと考えている。



研究室に保存された発達心理学ゼミの卒業論文

## 学科紹介 人間科学科

<http://jinbunweb.sgu.ac.jp/ningen/>

### 学科の特徴

人文学部人間科学科は「諸学の協働による総合的な人間の科学を追求する」ことを基本理念としています。「諸学」とは、さまざまな学問という意味です。具体的には、「社会」「社会福祉」「心理・教育」「文化」「思想」の5つの学問領域を指します。

「社会」とは、家族社会、地域社会、職場社会などにおける人間と人間の間を社会学の立場から考察する領域です。「社会福祉」は人生の出発点から終末期において出会う、さまざまな生活困難や貧困問題を研究します。「心理・教育」は心理学と教育学の見地から人間の発達や人間と人間の間について研究します。「文化」は考古学、歴史学、民俗学の領域から北海道の生活文化の特質について研究します。最後に、「思想」は哲学、思想、文学の領域から人間観や社会思想について研究するとともに、生命や環境の問題についても考察します。

ここにあげたいいずれかの学問領域を自己の専門分野としながらも、隣接する学問領域と協力することによって人間に関する生きた総合的な知識を修得することを目指しています。



### 学科の特徴的な講義・授業など

先に触れた基本理念にしたがって、5つの学問領域がクロスオーバーする形でカリキュラム（教育課程）が編成されています。学際性・総合性が第1の特徴です。

学生は4年間、一貫して少人数のゼミナールに所属します。大学での学びの基礎を身に付ける1年生の「人間科学基礎ゼミナール」に始まって、2年生・3年生のゼミナールをへて、4年生では大学生生活の締めくくりである「卒業論文」に取り組みます。ゼミナールと卒業論文を通じて自ら研究する姿勢を育成すること、これが第2の特徴です。

先の5つの学問領域のすべてにおいて実験・実習科

目が設置されています。学生自らが身体と頭を使って「現実から学ぶ」ことを重視しているからです。フィールドワーク重視、これが第3の特徴です。

将来、学校教員を目指す人は「教職課程」の所定の単位を修得することで、

「特別支援学校教員免許」を含む教員免許を取得することができます。また社会福祉関係の仕事に就こうとする人は「社会福祉士」「精神保健福祉士」の受験資格を取得することができます。さらに、博物館や美術館などに勤める場合に必要となる「学芸員」の資格も取得可能です。資格課程が充実していること、これが第4の特徴です。

### 就職・進路など

北海道、特に札幌圏の産業構造の特徴を反映して、サービス業、卸・小売業、飲食業への就職が全体の半数以上に達します。とはいえ、多様な学問領域をもった学科であるために、学校教員、学芸員、社会福祉士、臨床心理士などの専門職をはじめとして、さまざまな分野で活躍する卒業生を毎年、コンスタントに輩出しています。また、毎年、数人が大学院に進学して、さらに研究を深めています。これも人間科学科の特徴の1つです。

ただ、「資格を取得すれば就職できる」「大学院を出れば就職できる」と誤解しないでください。日々の地道な努力の積み重ねがあつてはじめて、栄冠を勝ち取ることができるのです。資格の取得や進学は目的ではなく、あくまで手段です。

近年、若者の就職難が日常的に話題になっています。主な要因の1つに、大学卒業者の増加に見合うだけの良好な就職先が日本国内に存在しない、という事情があります。ある著名な「グローバル企業」の場合、新規大卒採用者の半数は外国人です。

自らの進路と社会経済情勢の変動は緊密に結びついているのです。時代が求めているもの、それは「広い視野」「豊かな教養」「確かな専門性」の3点セットではないでしょうか。

平成21年度 札幌学院大学学芸員課程 実習展示

# 消しゴム展

「好きです、消しゴム」

10月26日～11月20日までの間、札幌学院大学A館1階の展示室にて開催しています。

入館料は無料です。

月・木・金曜日 9:00～17:00  
水・土曜日 9:00～13:00  
火曜日 12:30～17:00  
※日曜日・祝日は休館です。

平成21年度札幌学院大学学芸員課程「博物館実習生」  
【お問い合わせ】  
札幌学院大学 学芸員課程事務局  
011-386-8111 (内線4707)

## 学科紹介 英語英米文学科

<http://jinbunweb.sgu.ac.jp/~eigoiebei/index.html>

### 学科の特徴

高校生と話していると、「英語英米文学科に入ったらどんな資格が取れますか？」とよく尋ねられます。

よく勘違いされるのですが、大学は資格を取るだけの場ではありませんし、知識を積み上げるだけの場でもありません。知識や技能を身につけた上で、何をどのように考えるか、どのように表現したら他人に伝わるのかを、実践によって学んでいく場です。

英語英米文学科は、英語を学ぶだけでなく、英語を手がかりに様々なものの見方を鍛え、視野を広げ、柔軟でありながらも確立した自分を作り上げていくことを目的とします。「これを覚えておけば大丈夫」というような講義はほとんどありません。意味がわからない？それが高校から大学への「学びのパラダイム変換」であり、それを教えるのは本学教授陣が最も得意とするところです。

社会に出てから役立つ能力——情報収集力、判断力、批判精神、説得技術——を身につけたい人に、私たちは英語を通じてアプローチしていきます。

(英語英米文学科長 平体 由美)

### 学科の特徴的な講義・授業など

**English Camp** ニセコで行われた Oral communication D の All English Camp は名前通り、ネイティブの先生と学年を問わない約 30 名の学生でペンションに泊まり、英語漬けの日々を送るものです。3 泊 4 日のプランは事前に先生たちが決めています。高校までの机上の英語学習のようなことは、このキャンプではしません。ゲームを用いて自分の身体を使ったり、友人や先生と協力したりして、楽しみながら英語を学ぶことができます。人見知りの私でも自然と友人ができました！ですので、みなさん是非参加してみてください。

(英語英米文学科 4 年 渡辺 舞)

**英文講読** 1 年前期から 2 年前期までの必修科目「英文講読」では、2009 年度から、主に TOEIC の点数アップを通じて英語力向上を狙っています。

1 年前期は、入学時に作られたクラスで受講します

が、1 年後期からは、学力別にクラスが替わります（応用・標準・基礎）。応用・標準クラスはさらに点を伸ばし、基礎クラスは基礎学力を底上げします。2009 年度入学生の TOEIC 平均スコアは、1 年前期から 1 年間で約 140 点上昇しました（基礎クラスでも 100 点以上上昇）。TOEIC のスコアアップが最終目標ではないにせよ、学生のやる気は少しでも確実に上がるようです。

(英語英米文学科 眞田 敬介)

### 学科の学生活動(半期海外留学)



左端が筆者

私のホストマザーを含めメルボルンの人はずごく温かくて素敵なたちばかりです。City はにぎやかで多文化主義と言われているように、

日本では経験できないような、いろんな国の料理や文化を味わえるし、いつも活気にあふれています。学校生活は授業も楽しく、何でも話せる友達ができ、放課後にビーチに遊びに行ったりおしゃれな cafe に行ったり、Holiday にはタスマニア旅行に行ったりと 1 日 24 時間じゃ足りないくらい充実した毎日を送っています。メルボルンで過ごすこの 4 ヶ月間は、私にとって忘れることのできないかけがえのない貴重な経験でもあり思い出になると思います。またここに帰ってきたいと思えるほど私はほんとにこの町が大好きです。

I ♥ Melbourne!!!

(英語英米文学科 2 年 上山はつみ)

### 就職・進路など

私は教師になるという夢を実現させるため、英検や TOEIC などの資格試験を受験し自分の英語力を高める努力をし、大学の講義ではネイティブの先生の授業や英語学、TOEIC 対策講義などを積極的に受講してきた。また、3 年次から所属する専門ゼミでは教職ゼミに入り、英語教育について研究し、小学校「外国語活動」のボランティア活動を行った。

英米に所属しながら、こども発達学科の小学校教員免許取得のための科目を履修出来るようになったことは私にとって一番良かったこと。先生方は非常に熱心に指導してくれるし、一生懸命取り組む学生には様々な情報や支援をしてくれる。目標をしっかりとって積極的に先生方や他の学生とコミュニケーションを図れば、英語力の向上だけでなく様々な面で成長できると思う。

(英語英米文学科 4 年 佐藤みゆき)



右から 2 番目が筆者

## 学科紹介 臨床心理学科

<http://jinbunweb.sgu.ac.jp/rinshoshinri/index.html>

### 学科の特徴

臨床心理学とは、簡単にいえば、こころの健康を保つための様々な方法を学ぶ学問です。ここにはもちろん、こころの問題や病気、カウンセリング、心理アセスメント（心理検査）などの学習も含まれています。本学の臨床心理学科では多くの講義科目も用意されていますが、実習科目を通じ、臨床心理学の知識やカウンセリングの現場で用いられる技法などについて、実際に目にしたり、実際に経験したりすることで、体験的に身につけてもらうことに力を入れています。

そして、このこころの健康を保つうえでは、臨床心理学だけでなく、広く他の心理学や他の学問領域にも学びを広げていく必要があります。例えば、子どものこころの問題について理解・対応するには、子どもの心身の発達を扱う発達心理学や、子どもを取り巻く家族を扱う家族心理学などの知識が必須となります。本学科では、臨床心理学を取り巻く広い範囲の学びを提供していると考えています。さらに、精神保健福祉士の養成課程や、臨床心理士資格認定協会第一種指定校である大学院臨床心理学研究科などを有することも、特徴として挙げられます。

### 学科の特徴的な講義・授業など

本学科では、先ほど述べたように、広い範囲での学びを提供するため、様々な講義、実習科目が存在します。一例を挙げると、1年次の学生が最初に触れる専門科目である「臨床心理学概論」では、心理検査とはどういうものか、人生の各段階における発達とそれに関連して陥りやすいこころの問題、心理療法とは何をして、どのようなものがあるかなどについて広く学びます。「心理アセスメント」では、心理検査を含め人のこころを理解する方法について、その手段と難しさ、倫理的な問題について学びます。「臨床心理学演習」は、各教員が設定するテーマについて、それを学びたい15人ほどの学生で構成される、いわゆるゼミナールです。この科目は、各教員の研究活動や臨床活動の姿



勢により身近に接することとなり、大学生活で印象に残ることの多い科目となります。さらに学びを深めたい学生は、専門文献をより深く読み込む「文献購読」を履修したり、自分のテーマについて研究しひとつの論文を執筆する「卒業論文」を履修していきます。

### 学科の学生活動

カウンセリングや心理検査について学んでいる臨床心理学科の学生だからといって、他学部他学科



の学生の学生生活と大きく異なるということはありません。特に1～2年次は自分の興味関心の深い文科系・運動系サークルなどに所属し、仲間との交流を深めたり、ボランティア活動に従事したり、海外短期留学を経験したりと、その内容は学生によって多岐にわたります。ただ、心理学の基礎を学ぶに当たり、実験を行い、レポートや課題提出など要求される勉強量はやや多いかも知れません。

3年次以降になり、自分の進路が確定してくると、大学院に進学し、臨床心理を生かした仕事に就こうとする学生は、大学院受験のための勉強とより高度な卒業論文を書こうと努力することになります。精神保健福祉士課程を履修し、精神保健福祉士を目指す学生は、実習やソーシャルワークの技能を身につけることに専心します。さらに、一般企業への就職や公務員試験を受験しようとする学生は、それぞれの試験対策に取り組むこととなります。

### 就職・進路など

臨床心理学を生かした仕事というのは、実際にこころの問題を抱えた方や悩んでいる方と一対一で向き合うことです。これには、真摯な姿勢と高度な知識技能が必要とされます。従って、学科で学んだ臨床心理学を生かし、専門職として就職することを決めた学生は大学院に進学し、臨床心理士資格取得を目指します。また、一般企業に就職する場合、サービス業や卸・小売業の分野で就職する学生も多く存在します。さらに、精神保健福祉士として、社会福祉施設や病院等に就職する学生も、その数を増しつつあります。いずれにせよ就職する場合は、札幌市および道内が全体の7割近くを占めています。

## 学科紹介 こども発達学科

HPこ発の森 : <http://jinbunweb.sgu.ac.jp/~child/>

### 学ぶ雰囲気のある学科 積極的な学生たち

入学時から「子どもと関わる職に就きたい」「教師になりたい」など、明確な目標を持つ学生が多く、学年全体が仲良くまとまりながらも、互いに切磋琢磨して学ぶ雰囲気のある学科です。授業でのディスカッションは、いつも活発。学生ボランティアとして小学校の授業補助をする学生、地域の子どもと関わるサークルで活躍する学生、小学校の教職課程に加え、他の資格課程の履修や資格試験の受験をする努力家も多数います。卒業生の多くが、小学校や特別支援学校の教員として、他にも、民間企業、社会福祉法人などで活躍しています。

学生たちのふだんの様子は、学科HP

「こ発の森」で詳しく紹介しています。



### 「私の大学生活と進路」

(こども発達学科 4年 澤田 晴恵)

私がこども発達学科に入ってよかったと思う理由は、2つあります。第1に、授業が充実していることです。実習を伴う授業が多く、その中で、楽しさと共に、子どもがどう感じるか体感することができました。また、小学生の頃の体験を思い出すこともできました。そのことで、「自分だったら」と考え、どういう先生になりたいのか、深く考えることができました。

第2に、聴覚障がいがある学生への情報保障などを行う団体であるバリアフリー委員会に入ったことです。私はここで、「やってあげる」だけではなく「やってもらっている」ということに気づきました。人は支え合いながら生きてると身をもって知ることができました。また、広報部で活動して、伝えることの難しさも知りました。一言一句、真剣に検討している先輩や仲間たちを見て、言葉の大切さを知りました。

私は、毎日が充実していたから、将来をしっかり見つけるこ



とが可能になったのだと考えています。4月からは教壇に立つこととなりますが、大学で学んだことをしっかりと活かしていきたいと思っています。

### 「こども発達学科での大学生活」

(こども発達学科 4年 喜多 翼)

こども発達学科での大学生活では、教員を目指す上で必要となる様々な講義を受けました。特に各教科の指導法や学校経営に関する講義では、自分の知らない側面から教員や学校現場について知ることができました。そのような学びを経験して小学校の教員を目指す気持ちが更に強くなっていきました。また、子供たちを集めて企画を行う団体のSGU遊ベンチャーにも所属し、子供たちが安全に楽しみながら学べる企画を学生で協力して作るという経験も積むことができました。

教員採用試験に向けては、主に教職課程室で同じく試験を受ける友人と一緒に勉強してきました。同じ目標を持った多くの仲間が近くにいてくれたことで、常に前向きに試験対策に取り組むことができました。

私が教員採用試験に合格したのは、教職員の皆さんや仲間の存在のおかげだと思っています。自分を支えてくれた全ての人への感謝の気持ちを忘れずに、教員として頑張りたいと思います。



### 「こ発の4年間、そして進学」

(こども発達学科 4年 北村 公則)

こども発達学科での4年間は、あっという間に過ぎていきました。合宿オリや人文学部体育大会などの行事の折々に共に学ぶこ発の仲間と交流を深め、こ発ならではの講義や実習を通して子どもとの関わり方を学び、小学校でのボランティアや教育実習で、教育に携わることの素晴らしさや責任感を身をもって経験することができました。このような大学生活を送れたこと、そしてこ発に関わる多数の先生方のご協力もあり、道教育大学札幌校の大学院への進学を決めることができました。

4年間の大学生活で印象に残っている言葉があります。「こどもが好きでなければ教師にはなれません。ですが、こどもが好きだけでは教師にはなれません。」

この言葉と4年間の大学生活を胸に更なる飛躍を目指し精進します。数年後、こ発を卒業した仲間と同じ現場で働けることを楽しみにしています。

## 新任教員自己紹介



講師 大澤 真平  
(人間科学科)

社会福祉論、児童福祉論などを担当しています。以前は高校教員として進路指導の仕事に関わってきました。その経験のなかで、家族という枠組みのもと子どもたちの育ちと将来が不平等にもたらされている現実を目の当たりにしてきました。家族の状況に関わらず子どもの育ちが保障されること、逆に、子どもの育ちを保障するために家族の生活が支えられること、この一見すると相反するような社会のあり方を、子どもそのものを目的として実現していくためにはどうすればよいのか、社会福祉、児童福祉の観点から考えていきたいと思っています。

一方でこのような子どもたちの支えとなる実践者の養成にも取り組みたいと考えています。福祉や教育といった分野にとらわれず、学生さんが人間に対する深い理解と共感を持つことができるように、多くの人と出会う機会を提供することも自分の仕事だと思っています。なにより、これからの大学での生活を私自身とても楽しみにしています。



教授 白井 博  
(人間科学科)

着任してからちょうど9か月が過ぎようとしています。こちらには10年前から「学校心理学」の集中講義に毎年来ておりましたが、勤めてみて新たに気づいたことや印象を強めたことがいくつもあります。第一に、この大学は「人に優しい」ことです。事務の方の学生の対応を見ると決して頭ごなしにものを言うことがなく、実にていねいで親身に応じていることです。不慣れた私もいつも助けていただいております。また、それは教員の学生に対する姿勢にもあらわれていると感じております。教室で前の時間の授業資料を見る機会がありますが、指導に対する教員の熱意がこもっていることに思わず姿勢を正すことがしばしばあります。教員同士の話しの中にも学生をどう育てるのが常に出てくるのも新鮮な驚きです。

わずかな力に過ぎませんが、学生の支援に対して私にできることを精一杯努めたく思っております。どうぞよろしく申し上げます。



教授 土渕美知子  
(人間科学科)

2010年4月から人文学部人間科学科で「福祉科教育法」「社会福祉援助技術演習・実習指導Ⅱ」などを担当しています。3月までは児童の福祉や権利擁護の現場などで仕事をしてきましたが、たくさん子どもたちが福祉的支援を必要としている現状を目の当たりにして、そんな子どもたちに寄り添い、将来を見据えて支援できる人材の育成が求められていることを感じてきました。例えば「福祉科教育法」は、高校で福祉科を教える教員を養成する課程ですが、高校福祉科のみならず、すべての学校教育の中に福祉的視点が浸透すれば、生きにくさを抱えた子どもたちが少しは減らせるのではないかと考えたりします。日々、「教えること」の難しさを痛感しながらも、熱心に福祉を学び、ひたむきに支援のあり方を考える学生たちと、社会状況がますます厳しくなるこれからの時代を生きていく知恵と力を、ともに探っていければと思っています。



講師 水島 梨紗  
(英語英米文学科)

2010年4月に人文学部英語英米文学科特任講師に着任し、主に異文化コミュニケーション関連の講座を担当しています。

私の専門は言語学の一領域である語用論で、言語をその使用者やコンテキストとの関連から議論する分野です。近年、その理論的枠組みは第二言語教育の場でも盛んに応用されるようになり、状況に照らして円滑かつ適切にコミュニケーションを行うための方策を授ける取り組みが、これまでに数多くなされてきました。それらの先行研究に倣い、自身も様々な語用論の要素を盛り込んだ授業を積極的に展開しています。

本学におけるこれまでの指導経験から、実践的な英語コミュニケーション能力の向上に対する学生達の前向きな意欲を感じています。単に言語的知識を得るだけでなく、その知識を活かして何かを生み出すことの大切さを伝えるためにも、グループディスカッションや協同学習などといったタスク活動を多く取り入れ、クリエイティブな授業運営をしていきたいと考えています。

## 留研報告

## あつという間の半年間でした

平成21年10月1日から平成22年3月31日までの半年間にわたって、国内留学研修の機会をいただきました。忘れないうちにお礼を申し上げておきたいと思いません。ありがとうございました。

さて、その間、母校である早稲田大学の大学院人間科学研究科に「訪問学者」というあまり聞き慣れない身分で受け入れられました（交付された身分証明書にも「訪問学者」と記されていました）。この人間科学研究科は埼玉県の所沢にキャンパスがあるのですが、今回の留研では、この所沢キャンパスと、大きな図書館のある本部キャンパス（新宿）を行ったり来たりしながらという生活を送りました。

研修の主な目的は、わたしの専門である家族社会学の学説研究のための資料収集と検討、それから指導教員の池岡義孝教授のもとでの共同研究にありました。週のうちの半分は本部キャンパスにある図書館へ通い、例えばこの図書館とは20年来のつきあいになるのだななどと感慨に耽りつつ、取り扱い注意とされた微

臭い文献を用心深くコピーしたりしながら、また残りの半分は所沢のキャンパスに通って、共同研究のための作業に携わりつつ、池岡教授が大学院で担当されている「家族社会学演習」という授業に他の大学院生たちにまざって、授業を受けるのはひさしぶりだなと思いつつ、参加させていただきました。また、早稲田の人間科学部の学生さんたちとも交流しつつ、いまごろ札学の学生さんたちは卒論書いているだろうな、と思いつつ。

年末年始をはさんでの半年だったからか、思えばあつという間に終わってしまったというのが正直なところですが、結果としてみれば、年度内の刊行を目指していた単著（2月に無事出版いたしました）の最終的な校正作業にもじっくりとりくむことができ、実に有意義な半年間であったと思います。重ねてお礼を申し上げます。ありがとうございました。

（人間科学科 木戸 功）

## 留研報告

## Blended Language Learning: My Studies in Melbourne, Australia

Even teachers need to do life-long learning, so I was fortunate to have a six-month study leave to research how to use advanced technologies in learning foreign languages. I chose the University of Melbourne because Australia has long experience in distance education. With only twenty million people, this continent is as wide as the whole United States. Thus Australian teachers are used to having students hundreds of kilometers away. Originally using radio and postal mail technologies, now teachers use the latest Internet tools to teach anything, including how to speak, read and write a new language.

In my six months in Melbourne, I studied a new form of teaching called, “blended language learning”. In this method, teachers mix or ‘blend’ face-to-face and Internet technologies. In face-to-face teaching, we often have two students do conversations together. This is called pair-work. Pair-work is a great technique because you learn good eye contact and how to be friendly with your voice and face. Next, we mix this face-to-face task with an Internet task,

such as reading a story and answering some questions. The webpage gives fast feedback, so students know instantly which answers were right and which ones were wrong. Videos and voice recordings are also easy to show on the web.

This research was fascinating for me. Now at SGU, we have built new ‘Blended Language Learning Rooms’ for all students to learn English. Students can enjoy the best of both old and new technologies. Learning a language is still hard work, but hopefully it can be a fun experience as well.

（英語英米文学科 Don W. Hinkelman）

Don Hinkelman standing with Dr Paul Gruba, a professor of applied linguistics, in front of the Clock Tower of the University of Melbourne, built in 1854.



## 編集後記

校正締め切りの2月14日と翌15日には、人間科学科と臨床心理学科で卒業論文発表会が開かれていました。とくに1年生の基礎ゼミナールで担任した学生諸君の発表を聞いたり要旨を読んだりすると、ほぼ4年前に入学してからのそれぞれの学生生活が想像され、それに伴って自分自身のこの4年間の人生を具体的な記憶として思い出すことができました。皆さん卒業おめでとうございます。どうもありがとうございます。（お）